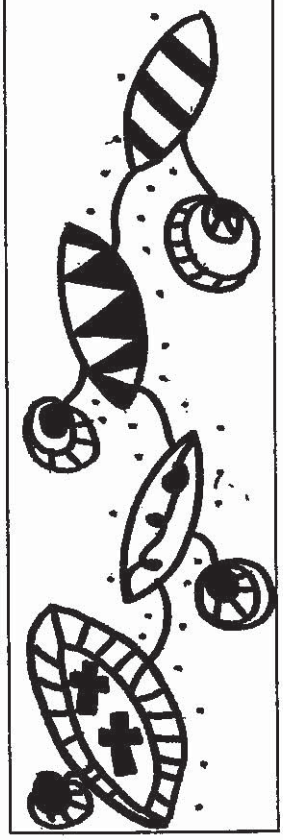
明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

2009. 7. 22

あんげろす



小山清の回帰

小山清が太宰治の推挽によって小説「離合」（東北文学）を発表したのは、昭和二十二年で三十六歳になっていた。このとき小山は北海道の夕張炭鉱で採炭夫をしていた。師の太宰の死の知らせに上京してからは「聖アンデルセン」「朴歯の下駄」「落穂拾ひ」などの美しい佳篇を書きついでいく。四十一歳で結婚して二人の子が授かるが、四十七歳のとき脳血栓で倒れて失語症に陥ってしまう。妻が内職によって生計をたてる。一年半後、妻が家計の苦しさと心労から自殺をとげた。失語症の治療に励む最中であった。作家もこの二年後、急性心不全のために死去した。まだ五十二歳と早すぎる小山が残したものは、六冊の小説集と二人の幼い一男一女だった。自宅での告別式には、亀井勝一郎、井伏鱒二、阿川弘之、臼井吉見、小沼丹という小山の最高の受読者も参列したが、見送る人の少ないさびしいものだった。明治学院中学部四年に転入してくる前の年、戸山教会の高倉徳太郎より受洗するが、三年後には教会から遠のいていく。しかし晩年になっても讃美歌は忘れずにうたって聞かせたほどだという。葬儀の直前に妹さんが「故人のためキリスト教式でやって上げてほしい」の一言で無教会主義の高橋牧師が小山が好んだ聖書のコリント前書第十三章を朗読した。つづいて同じく無教会派の塩田章牧師が告別の辞をのべ祈祷したあと、小山清万歳を唱えたと阿川弘之が追悼文で書いている。こうして小山清は三十五年ぶりにキリスト教に回帰したのであった。なお小沼丹は小山清を悼む小説「連翔」という名品を残している。

村　上　文　昭

第４９号
２００９年７月